

埋文センターニュース

津市埋蔵文化財センター

第11号

2000.3.1



葦治城跡 連続する郭と掘立柱建物

峯治城跡（第3次調査）の概要 ～最近の発掘調査から～

1. はじめに

峯治城跡は、津市北部の志登茂川下流域を一望する丘陵の突端に位置します。埋文センターニュース第4号(1996.10.1)でもお伝えしたとおり、これまで2回にわたって行われた発掘調査の結果、峯治城は津市内で最大規模の中世城館であることが判明しています。

今回の調査区は第1次調査区（県道部分）の東側で、調査前は竹林が独立丘陵状に残る場所でした。城の東端に当る部分のため傾斜地がほとんどですが、郭の平坦部分を中心に約400m²の範囲の発掘調査を実施しました。

以下、発掘調査で確認されたことを中心に、峯治城跡についての概要をまとめておきたいと思います。

2. 峯治城跡の位置と周辺の状況

峯治城のある場所は、志登茂川と安濃川に挟まれた標高40m前後のなだらかな丘陵で、この丘陵上には中世城館のみならず、弥生時代以降の多くの遺跡が確認されています。

伊勢国司北畠氏と国人領主長野氏の勢力下にあった中世後期のこのあたりには、安濃川流域で最大規模を誇る安濃城をはじめとして多くの城館が築かれます。今回調査した峯治城周辺には、同時期の城館として西側に近接

する場所に上津部田城が、やや離れて渋見城があります。上津部田城はその位置関係や規模の大小から、峯治城と「本城－支城」の関係にあったとも考えられる城館です。また、渋見城は峯治城と同様、深く幅広い堀と土塁を巡らせた大規模な城館です。

津市の南部に目を転じると、丘陵突端の海岸線に最も近い場所に垂水城があり、交通の要害に築かれたその立地は、峯治城との共通性が見いだせます。また、雲出川左岸の雲出島貫遺跡では、中世城館の初現的な形態となる12世紀代の居館が近年の調査で確認され、わが国の城郭史を考えるうえでも注目される発見がありました。

3. 確認されたおもな遺構

約400m²の調査区の中で、細かく階段状に連続する4つの郭が確認できました。

I郭 調査区南端にわずかに残り、北側は溝によってII郭と区画され、あたかも古墳の墳丘のような形です。調査区最高所の平坦面も残存はわずかで、ピット等は見当りません。

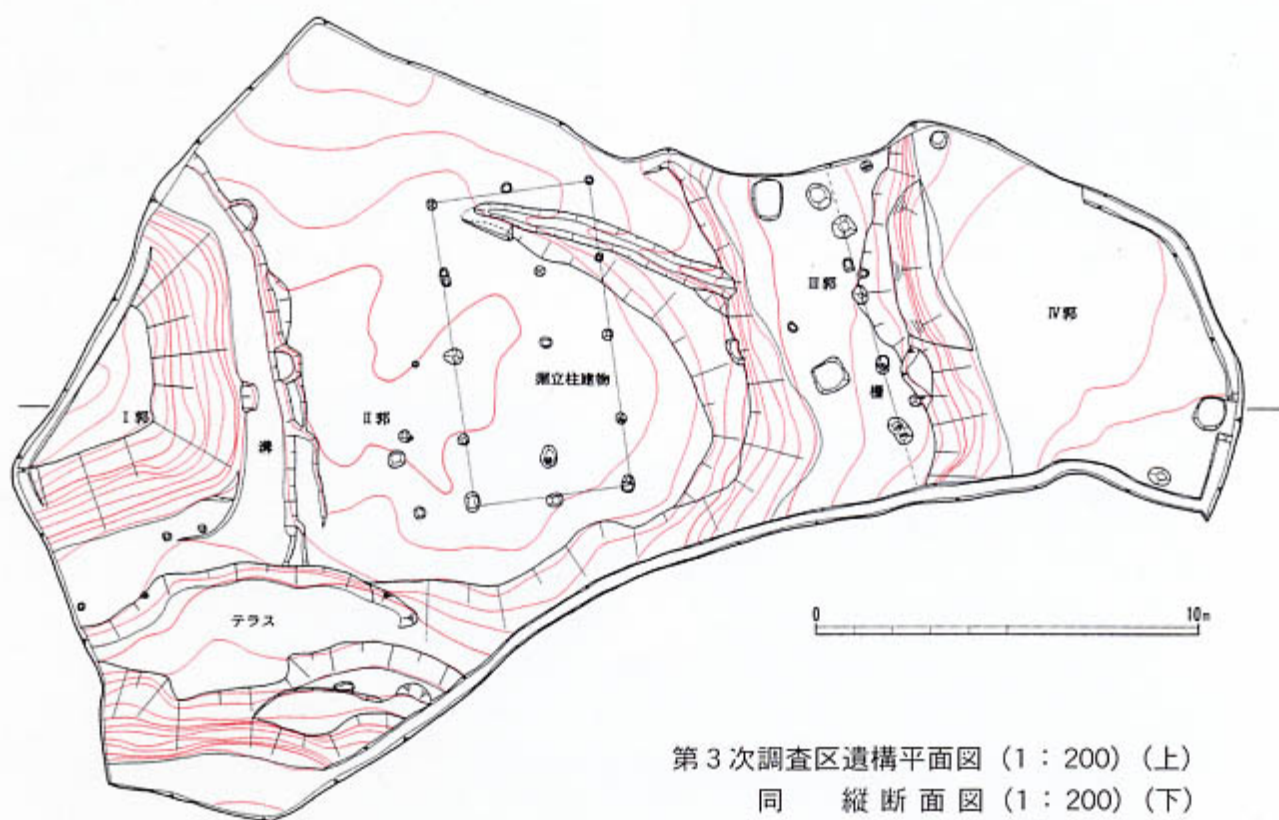
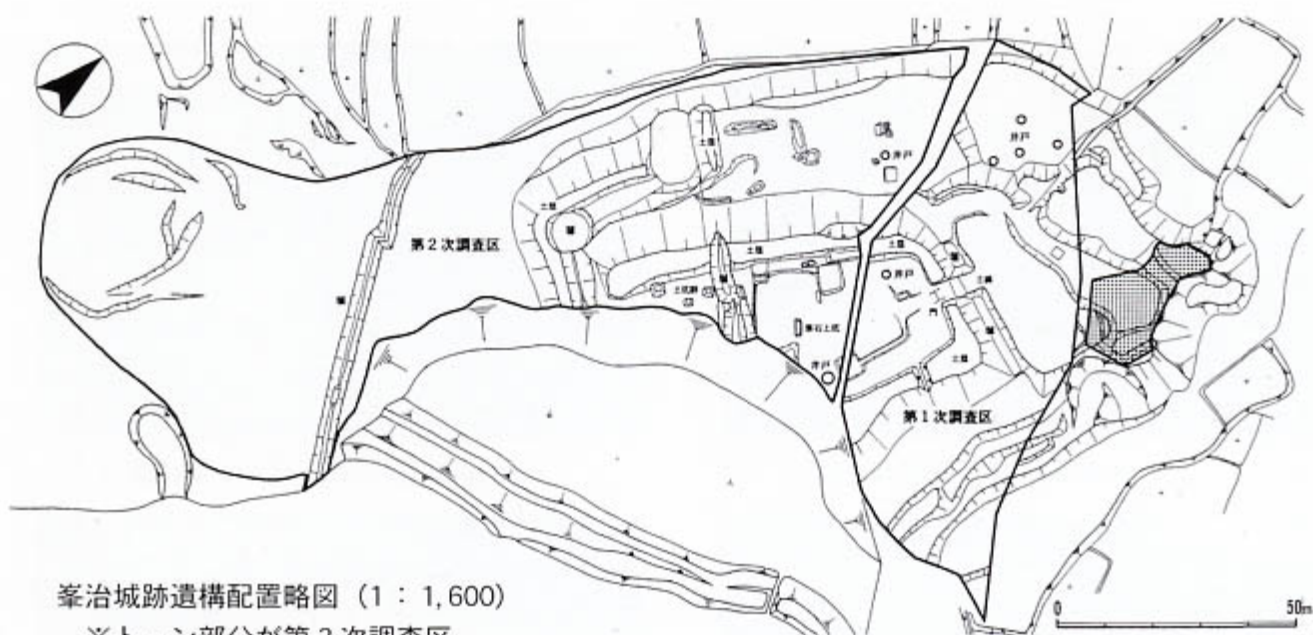
II郭 調査区で最も広い平坦面をもつ郭で、県道部分の第一次調査では第IV郭に相当します。中央には溝と平行に桁行4間(8.2m)×梁行2間(4.1m)の掘立柱建物があり、峯治



主要中世城館位置図



調査区遠景



城では最も大きな建物の発見となりました。

Ⅲ郭 幅3mほどの小さな郭です。Ⅳ郭との境には、ほぼ等間隔(1.8m)にピットが並び、柵のあった可能性が高いと考えられます。

Ⅳ郭 調査区の最下部に位置する郭ですが城に関連する明確な遺構はありません。

溝 Ⅰ郭とⅡ郭を区画する幅1～1.5m、深さ60cmほどの溝で、今回の調査で見つかった遺物のほとんどはこの溝から出土しました。また、埋土には蛸を主とする貝殻が集中して廃棄された場所があり、層になって堆積しています。

4. 出土した遺物

出土遺物は土器がほとんどで、煮炊き用の羽釜(1～3)をはじめ、茶釜(4)や皿(5)などの土師器が中心です。過去の調査でも羽釜など煮沸具の出土割合は高く、外面に煤が付着している状況から実際にこの城で生活を営んでいた様子がうかがえます。今回の出土品では羽釜に吊り手孔のあるもの(1)とないもの(2)、

外面の調整が他と異なるもの(3)があるなど様々なバリエーションがみられます。多量の羽釜に対して鍋の出土はなく、雲出川流域以南の“南伊勢鍋文化圏”に対する“中北勢羽釜文化圏”の一角として、煮沸具の特徴的な分布状況を示していると言えるでしょう。

陶器類では、少量ながら瀬戸美濃産の天目茶碗(6)や皿(7・8)、口径が50cmにもなる常滑産の大甕(9)が出土しています。

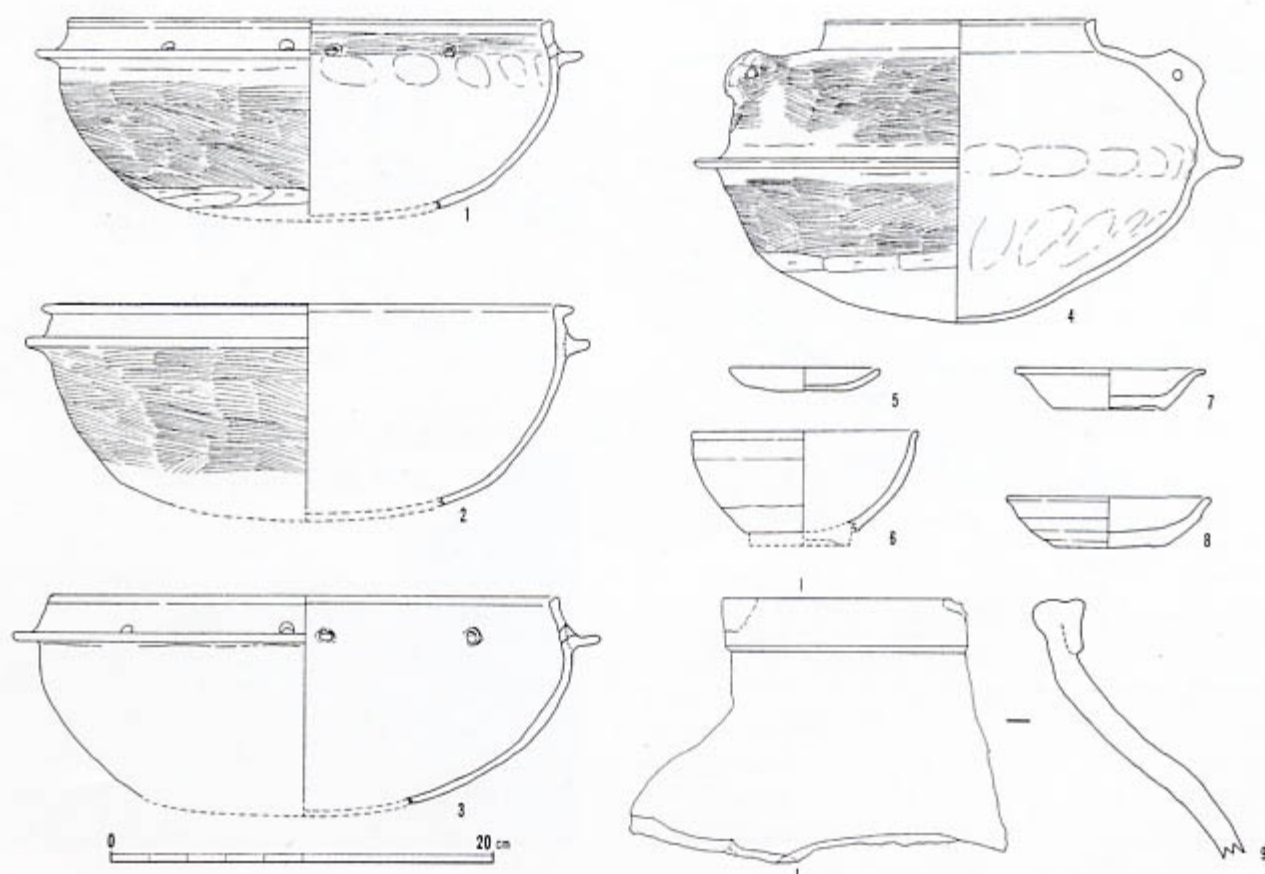
5. 調査のまとめ～第3次調査の要点～

以下、今回の調査結果の要点をまとめると、

①Ⅱ郭を中心に、平時の生活を伴った居館の色合いが濃いこと。

②Ⅲ郭のような矮小な平坦地^{わいしょう}も、柵の施設によって郭の一機能を担っていること。

③出土遺物では、煮沸具(羽釜)に中北勢地域特有の分布状況を看取れることが挙げられます。こうした特徴的な調査結果は、峯治城跡の全容解明に向けて大きな指針となるものと考えられます。(中村)



出土遺物実測図 (1:4)



掘立柱建物



I 郭残存部と区画する溝



棚とⅢ・Ⅳ郭



溝の土器と蜆層堆積状況



第3次調査で出土した遺物

遺跡紹介⑩ 垂水城跡

垂水城跡は、垂水地区西部の丘陵上にある戦国時代に築かれた城跡です。平成5年から6年にかけて発掘調査が行われ、城の様子が明かになりました。

城の構造は、標高45m前後の丘陵頂部に主郭（中心部分）を築き、そこから四方に延びる尾根に郭や堀を設けていたと考えられますが、主郭より北側は宅地造成によってすでに消滅していました。主郭は四方を土塁で囲まれていたと考えられ、深さ7m以上の井戸が見つかりました。Ⅱ郭は主郭の南側にあり、掘立柱建物5棟と門跡2基が確認されました。Ⅲ郭には生活痕跡がほとんどみられず、武者溜りのような場所であったと思われます。また、主郭の西側には幅約13m、深さ約10mの大規模な堀切がありますが、この城はある時期に改修が行われたようで、それ以前にはⅣ

郭があったと思われます。

ところで江戸時代の書物には、北畠氏と長野氏が垂水の鷲山で戦ったとされていますが、地名も残ってなく真相は不明でした。ところが、最近明らかになった史料や江戸時代の絵図から、垂水城跡は北畠城、池の谷砦跡は南畠城と呼ばれていたと確認でき、さらに北畠氏系の武士がこの城を守っていたことから、少なくともこの地で合戦が行われたことは史実であったと考えられます。

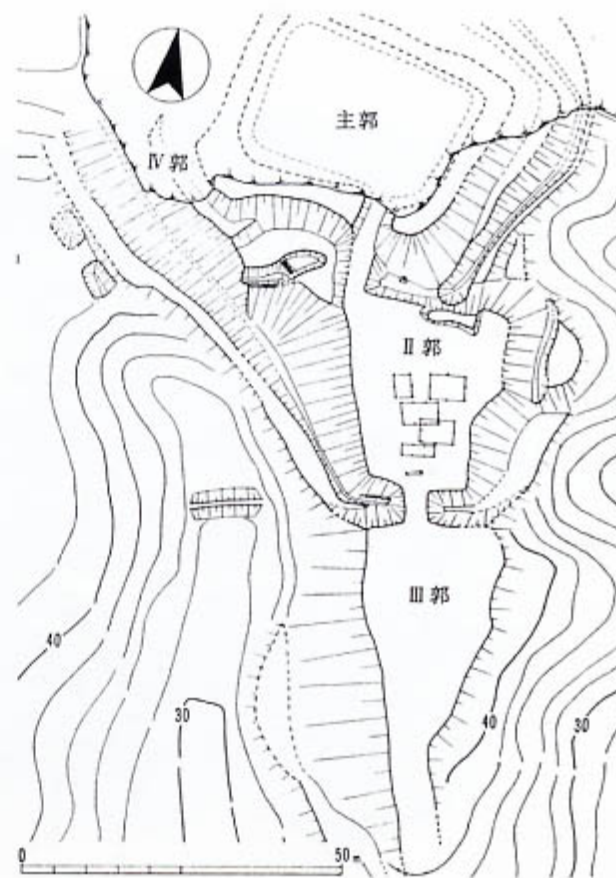
垂水は、北畠氏・長野氏それぞれの領域である一志郡と安濃郡の境界近くにあります。また城からの眺望は非常に良く、敵を監視するのに絶好の場所にあることから、この城は北畠氏の最前線基地のような役割を果たしていたのかも知れません。（米山）



垂水城跡位置図（1：25,000）



主郭東堀（北から）



垂水城跡略図（1,200）

遺物紹介⑩ 桐狭間 1 号墳出土の形象埴輪

今回は、津市埋蔵文化財センターに保管されている資料の中から、桐狭間 1 号墳から出土した形象埴輪を紹介します。

桐狭間古墳群は、市の中央を流れる岩田川上流の片田田中町にある古墳群です。1 号墳は、岩田川右岸の標高約 30 m の丘陵突端に造られていて、そこから岩田川に沿ってひらけた片田のまちを望むことができます。また、付近には、新畑遺跡、高井古墳（市史跡）、志保遺跡、片田東浦古墳群、八乳合古墳群などの古墳時代の遺跡があります。

桐狭間 1 号墳は、崖崩れによって墳丘の北側半分が大きく削り取られていて、『伊勢片田村史』（昭和 34 年刊行）には、その崖崩れの際に、鉄刀や須恵器、土師器、埴輪などの破片が採集されたと記されています。

ここに紹介する形象埴輪は、長さが 10.7 cm、厚さが 1.4 cm の板状の小さな破片です。よく焼き締まっていて、表面に細い線で模様が刻まれているのがわかります。破片の左端には、鉤の手のように切り取られた部分と、わずかですが半円状に切り取られた部分が残っています。また、鉤の手に切り込まれたところを境にして、ちょっと段がつけられてい

ます。端部に半円状の^{えく} 縁りがあること、器面を分割する段があることなどから、この破片は、石見型埴輪の一部と考えられています。

石見型埴輪は、奈良県石見遺跡から多量に出土したので、その名がついた埴輪です。ポツポツと小さな孔のあいた変わった形をしたこの埴輪は、いったい何をモデルにしてつくられたのでしょうか。これまでは盾形埴輪^{たてがた}の一種と考えられていましたが、最近では^{ゆづ} 杖や^{ぎょくじょう} 玉杖がモデルだとする説などもあって、実のところ、まだよくわかっていません。6 世紀前半に近畿地方を中心に盛行し、三重県では、津市半田藤谷窯跡群と安濃町迎山遺跡で出土が確認されています。

県内で 3 例目となる桐狭間 1 号墳の石見型埴輪ですが、藤谷窯跡群で生産されたものと比べてみると、端部の形や段のつけ方、線刻の模様が異なっています。どうも津市周辺の埴輪には工人の系譜差があったようです。

また、石見型埴輪は、愛知県水神古窯^{すいじん こよう}にも類例があり、津市周辺での出土例の増加は、畿内と東海の埴輪文化の伝播ルートを考えるうえでも注目されます。

（藤田）



桐狭間古墳群位置図（1：25,000）



出土形象埴輪片（1：2）



石見型埴輪復元図

埋文センターの一年

今年、埋文センターで本格的に取り組んだ普及事業として、小学校への「出張講座」があります。5月7日の育生小学校を皮切りに6校の小学校で開講しました。児童の皆さんには、土器などの遺物を実際に見て触れてもらうことを重視する講座としました。教科書の中の歴史だけでなく、自分たちの身近にある歴史を感じとってもらえたのでは、と思います。また夏には、前号でも紹介した『安濃津子ども遺跡調査隊』として、実際に遺跡の

発掘を体験してもらう事業も実施しました。

発掘調査は1遺跡の本調査（峯治城跡）と6遺跡の試掘調査（尺目遺跡ほか）を実施し、文化財保護の面では、埋文センター所蔵の高茶屋銅鐸1号鐸が、考古資料としては初の津市文化財に指定されるなどの動きがありました。一年を通じたセンターの見学者は約600人と横ばいですが、出張講座で興味をもった小学生の来館があるなど、「リピーター」も増加しています。

平成11年

- | | |
|---------------------------------------|----------------------------------|
| 4月15日《見学》神戸小学校遠足 102名 | 8月4日《研修指導》『体験研修』（片田小学校教諭1名） |
| 27日《会議》県埋文担当者会議に出席 | 9月8日《見学》上浜町老人会 35名 |
| 5月6日《保護》高茶屋銅鐸1号鐸、津市文化財に指定〔有形文化財・考古資料〕 | 22日《調査》牛下し遺跡試掘調査 |
| 7日《普及》出張講座（育生小学校） | 《見学》津市婦人会 35名 |
| 10日《普及》出張講座（雲出小学校） | 27日《会議》県埋文担当会議に出席 |
| 《調査》（仮）西阿漕田遺跡試掘調査 | 10月21日《会議》公立埋文協研修会（神戸）に出席 |
| 17日《普及》出張講座（養正小学校） | 25日《調査》峯治城跡発掘調査（12月14日まで） |
| 20日《普及》出張講座（櫛形小学校） | 11月2日《職員派遣》安濃町へ遺構実測応援 |
| 24日《普及》出張講座（西が丘小学校） | 4日《会議》県埋文連絡調整会議に出席 |
| 6月4日《普及》出張講座（大里小学校） | 5日《資料貸出》安濃町特別展へ藤谷埴輪窯等の遺物を貸出 |
| 9日《調査》育生小学校校庭遺跡立会調査 | 24日《会議》公立埋文協東海北陸ブロック会議（松阪）に出席 |
| 22日《調査》尺目遺跡試掘調査 | 25日《研修指導》『職場体験学習』（久居中学校4名） |
| 29日《見学》市政教室 26名 | 《調査》雲出島貫遺跡試掘調査 |
| 7月5日《調査》向山遺跡試掘調査 | 12月1日《資料貸出》鈴鹿市考古博物館へ殿村古墳群等の遺物を貸出 |
| 7日《会議》県埋文担当者会議に出席 | 22日《資料貸出》豊橋市美術博物館へ藤谷埴輪窯の遺物を貸出 |
| 8日《見学》家庭教育学級（高野尾小） 35名 | |
| 13日《見学》家庭教育学級（高茶屋小） 30名 | |
| 24日《普及》『安濃津子ども遺跡調査隊』 | |

《編集後記》

今号では、調査概要の報告や遺跡紹介を通じ、さしずめ「中世城館特集」となりました。これまで津市内では比較的まとまった調査が行われており、随時各城跡の様子もお知らせできると思います。どんな遺跡が取り上げられるかは、乞うご期待。（中）

発行日：2000.3.1

編集・発行：津市埋蔵文化財センター

〒514-0058

三重県津市安東町1225

TEL 059-229-0210

FAX 059-229-4601

印刷：森田印刷株式会社